

訪問看護スタッフに支えていただいた夫

古庄 啓子

中咽頭癌末期在宅療養。気管切開で自慢の声を失った夫は、胃ろうになり、顔のむくみで目がふさがり、ガチガチに硬くなった首からの出血が次第に頻度を増していきました。

訪問看護師さんは、どんなときもまず本人に声をかけ、適切な情報と複数の社会資源を提供し、夫自らが道を選んで進めるように配慮してくださいました。「できることは（できるうちは）何でも自分でやる」という頑固さを尊重し、転倒しそうな自己流シャワー浴を見守り、うな重や松茸ご飯・サンマの塩焼き・和菓子からワインまでミキサー食にして胃ろうで楽しむ「食いしん坊のこだわり」を笑顔で応援していただきました。ゴールはいつになるのか、どんなふうを迎えるのか、痛くないか、苦しくないか、怖くないか、不安の壁にぶつかったときには、ホワイトボードに書き綴る思いを行間までしっかり読み取ってくださいました。

そして、死は決して特別なことではなく、日常にごく自然にやってきました。夫が心穏やかに旅立ち、力尽きるまでの生きざまを、自分の家で子ども達に見せることができたのは、機転の利く看護があったからこそ。最後まで主人公として尊重され支えていただいきながら、夫は、彼らしい人生の幕を閉じることができました。